

かかわる力の発達と保育の質に関する研究 [IV]

< 2 > かかわる力の発達に及ぼす要因の分析と保育のあり方 (2)

—タイプ別分析から、保育者と保護者の共通理解に立つ保育へ—

○海野美代子・海野展由・伊井万澄 (一番町保育園)・土方弘子 (同朋大学)・諏訪きぬ (明星大学)

1. 研究の目的と方法

5歳児の育ちをとらえる指標を用い、過去4年間の数値に表れた結果の分析を保育期間の長期・短期という視点で行ってきた。また各年度の特徴的な表れをとらえ、様々なタイプ別事例から、かかわる力の発達に及ぼす要因の分析を試みた。

2. 3年間 (研究 [I] ~ [III]) の結果と考察

研究 [I] では家庭環境・親の養育態度、特に「子どものそのままの姿を受け入れるタイプ」「親の理想とする姿に我が子を近づけたいと要求するタイプ」によって得点のバランスを分析した。結果、「要求タイプにおいては、自己信頼感の充実、情緒の安定が育ちにくいこと」「受け入れタイプでは、自己信頼感が育ち、新しいことへのチャレンジ、周囲へのかかわる力が育っている」傾向が見られた。

研究 [II] では、この年度の短期児に家庭環境の不安定な子、また家庭環境の変化による転居、転園の子が目立ったため、評価点は長期児の方が明らかに高得点となった。さらに、この年度の特徴として、同一担任による長期間保育があった。クラスの安定度は高く、保護者との共通の子育て感を育むことが出来た。反面、新しい人や遊びとかかわる力の広がりにおいては、担任が変わることの良さも考えられた。そこで生活面においては担任が中心となるものの、同一担任長期間保育のデメリットを抑えるためにも、遊びの面では自分自身及び異年齢も含めた様々な友達や他の保育者の興味関心に触れながら遊びの世界が広がるよう配慮して保育した。

研究 [III] では、3回目の5歳児の育ちをとらえる指標での得点において、保育期間の長期児・短期児という視点からでは明確な差異が見られなかったため、得点項目のバランスに共通点があるタイプ別に区分してみた。すると、短期児にタイプ3 (生活力、あ

そび力、表現力の項目は高いが、自己信頼感、かかわる力の項目が低い子) の分布が見られた。このことから、生活力は園生活に慣れるに従って身につけていくことが多く、一度習得したものが低下することはほとんどないことがわかった。あそび力、表現力にも同様の傾向が見られる。一方、自己信頼感やかかわる力は、その子を取り巻く環境の変化によって揺らいでしまうことが多い。

目に見える身辺自立や技術習得の援助はわかりやすく、成果も (個々の発達段階を見極めつつ) 比較的短期間で見えてくる。目に見えない様々な力にこそ、その子らしさが表れる。この自己信頼感・自己肯定感の育ちは、園の保育・保育者の思いと保護者の思いに共通しているところが多いほど、その子の育ちに良い影響を与えていると言える。

3. 研究 [IV] の方法と結果

本研究 [IV] では、4年間のデータを、保育期間の長期・短期、親の養育態度、主な養育者の気質、得点の分布、保育のあり方等、同一の観点で分析し得点バランスに特徴のある ABCD のタイプ別に抽出してみた。

タイプ A (自己信頼感、生活力、あそび力、表現力はあるが、かかわる力の弱いタイプ) は長期児・短期児ともに、自己信頼感—3かかわる力の中でも意見の対立やトラブルを解決する力に弱さが目立つ。これは多分にその子の気質によることも多く、Eちゃんなどは、その控えめな優しさの部分で周りの関係の潤滑油的存在になっている。

タイプ B (自己信頼感に弱さが見られるタイプ) のCくんは、新しい場面での緊張が目立つ子であるが、両親がしっかりと受容しており、長期間保育の繰り返しの体験を通じて出来るが増えている。しかし、心の強さについては、本人の気質もあって安定が難しい。またSちゃんは、不規則な生活リズムが整えられ

ず、母親はほとんど放任状態で祖母が主に養育している。長期間同一保育者であったため、家庭へのアドバイスを継続して行い、保育者と保護者との共通の子育て感も育まれた。ほとんどゼロの状態からここまで育ってきたと言える。

タイプC（自己信頼感、かかわる力に弱さが目立つ）k、l、o、Yともに家庭状況が安定せず、周囲へかかわる力が育ちにくいのは止むを得ないところである。ただ短期間でも園で生活したことにより、基本的な生活習慣や遊びを広げる力は育っていった。

タイプD（全体的に低得点）「か」くんの場合は、両親が共に仕事中心の生活を確立した年齢で本児を出産し、育児も祖母に助けてもらうことがほとんどであって、仕事のペースをそのままに生活していた。本児と付き合う時間はどうしても本児の言いなりになってしまう傾向がある。本当の意味での親子の心の密着が育ちきれず、自己信頼・肯定が出来ずに、失敗することや出来ないことを見られたくない思いから、遊びの場面でも仕切り役になったり、審判の役目をしたりということが目立つ。

Vくんはアスペルガー症候群という軽度障害を持つが、入園より同一保育者がかかわり、家庭との連携も良く、ゆっくりではあるが着実に成長している。Dくん、Nくと親のタイプは違うが、どちらも養育に関して親が一人では何も決められない傾向にある。Hくん、「き」くんに関しては、近年よく報告される高機能障害的傾向のボーダーライン上に位置すると思われる場面が多いタイプである。1対1の対応、繰り返しの言葉がけ等、本人にわかりやすいよう丁寧に接することを心にとめ保育してきた。

4. まとめ

かかわる力の根幹となる自己信頼感が育つためには、そのままの自分が受け入れられ認められ大切にされていることを子ども自身が実感出来ていることが、まず大切な条件となる。そのためには家庭での生活が安定し満足出来ていることが土台となる。この部分は園として助言したり援助することは出来ても、代役となることは出来ない。

様々な観点から分析し痛感することは、「保育園で長期間保育していく上で最も大切で最も困難なことは、保護者との共通理解をもって保育すること」ということである。保育の形態や方法をその時々ニーズに合わせ、子ども達にとって出来るだけ家庭に近い環境で安心して過ごせる場を作ること、また集団生活の中でこそ体験出来る学びの場を充実させること、こういった本来の保育の仕事以上のことがますます保育現場に求められてきている。保護者に一方的に指導することではなく、また保護者が一方的に保育サービスを要求することでもなく、保育者と保護者が相互理解しつつ、共通の保育感を育んでいく努力が必要である。保育者と保護者とが子育てのパートナーとなれるよう、対等の立場に立って保育と子育て支援を進めていく必要があり、それは双方がそれぞれの責任と役割を自覚しつつ、協力し行う子育ての共同作業であると考える。

（タイプ別表の詳細については当日資料として添付）

以下に参考としてタイプBを掲載

	保育期間	兄弟	主な扶養・援助	養育態度	特記事項	得点が低いもの
C	長	兄	ほとんど両親で	受	新しい場面で緊張自身がない できたことかで自信となっていく	自—2、3
F	長	兄	ほとんど母が (父定職なし)	要	母の要求きびしい。特に就学前 できるできないのこだわり	自—1
S	長		ほとんど母方 祖母が離	放任	不規則な生活リズム 友達への関わる力もでない	自—全体が評価3